池元圃芳か

特別
へ5
6086
2

鷹筑波集巻第二

尹平

花くさ梅甲日る赤ぶちる
ぶち躍け梅ちゆのつぶ就
むし時数ものを序倦乃ひ就
菊の葉やうて
菊ものを天ちりあ何ま登
綿ホ似ち作ちく生雪数ニ就
ゆち兎ちの乃ちるものは蓑ホ
月ものくちちわつ系ち
蓑乃日ホちちる山をてかり
ちいちりけを
作ちづ乃ちて乃ちて菊りわひ
数ちちちしもぬを思ち人

特 八5 6086 2

46 4845

屋うら屋の壁をこう壁の貧乏
物もたて垂加藩とうけをを
雑藩うら苦屋よりつひ
うしやうて一只紙こ惡ーも
なぐーへまうこすかきてん鉄砲
鉄炮をうら海も字川なら
濱いくさひろいくきぐや甲貝
やうかくまもうち死すする
あうさうやひ兵あるおちの農
んうを売りうくく庶ー
梓弓引いて志れもよ紀とこ
紅葉のあーあ買ん市さち
ひ敵さぬらもえうぐ馬剣て

いるあうう光産者よ鞭けて
ちうぐくさ苦や責めトみ
庶の鉄れうう義あまぐう
まを産れぐ蜻のけあひ
切り合て紀えなるこにあく
なれなぐみるあまて具産
桜形て防至ぐにふとれちご橋
嘉和多紀川御ひよ嘉の祖
年部もなも百性乃まい
家よけくさ鳥りのハうろ
伊藤の縁部まけハ田ぐ部
九二市ぐ代京ようみうり

一石のうれ水引　礼銀　ゑ

清水やうち市ちかも首と次

四条川原てまつる人　孔

人よりとぐれ　とり切ぐらき

うみあひ下　ひたりうり瓜の色

ちゑ井の水　よ　ひたくき

てんぐ人のわくまちわらの面帽や

伊保村九兵衛　之次

覚瓜茶屋　月日かりう物

豆腐　枝やうち物や十文字

仏の座つゆ　れの草の葉の

よ夫ぐち　あ　たけつ田

芦あとへ　ま　ゆ

春日野　そそれ　ゆ

けんそ　ぎ　ぶ

男沢の　ぶ

ふ葉きあ　ま　ぬ

ぎそ　ふ　ぬ

形くしの根　ぶ

山口　ぶ

水ぐ　れ井

一　新冠井吉宗　恵

ゑそたいの　ぶ　ぬ

みるへも　ぬ　ぬ

小原保右衛門　宝政

濃紫や若紫とこそなけれども
染衣は萬代却てみす先ぞ見ゆるか
はらふだいは露乃まぎやさかの薄
竹本伝右衛門 友房
やなぎしまに切てらうこぶ柳かな
ゑせおやとの縁はかく時なる
秋らしき風をたいもあまき筆かな
乃事さ八筆かも流さて文月来
川ばたに荻ちるとや腰うた
あきくの月もくはくとめてあまで
車とけ秋おしとく屋也
はちこちくとやみなそらん
傍女で秋ためぼしまくひざへ打急で

まぐおぼ八つ秋は深し大森かな
ゑんてゆく水乃みえぬりかな
津田 久甫
月乃上秋雨風のつまやこ梅柳
奥村伝右衛門 直保
寺町の毛にさすはぎや常皇
西川源兵衛 重元
落る露八みさき道や雨乃足
さやかれ葉かなく摘を入あまかな
他右衛門 利貞
年の矢乃ゆるかも立ちぬめ秋
あと里八ゑしのかしらこそ年かな
乃りまふやえまそくいぬの萩乃ふ

きりつぼのもとや八条橘花香外
のむしの声八しくたち花のもとに外
行くと望と知りしべきかとれ雲外
ちぐさのうれハ善天の月もそらに外
入る月ハまんじくに外そめ人衆外
やよろずやけくちるそてうえ花也袖
夕雨にも野のうぐいすのこさ
見て雪ハ髪ハ白乃かくべ外
くもいのまくこめありあるもみり
天皇代まつりれ則人書入て
髪ぬぐく文のうちきハ新人
柳乃ゆれわづふわさゆゆ
ふまくさげあるあ乃大寺

を柳乃糸ちりはりゆ人
老てハ多山人をひよりれろ
橋乃山ゆ代こうふれらじあちち
臺所乃代細の鶯のすくく
紙摩まも条宮人ひとり
すのきりとみきえ乃新
むすれ我こにに月も出ろり
市の乃乃代入ひとも
月新まくこのうろ滝吉山
山もみとあこれ事乃海
斎代ものまてしにそゆ大欲
激くの俗乃ときれ世乃中
時雨の山ほ人吉の芭蕉葉

葛城山よりあるき始り
生駒乃西まも今ハ数そ先て
寒さいとそてもや大学
見くるにわたるたよりやきれぬ
沒てきれぬいひぬれ我ら意
どもれ共ちにうり子著書
岸生てたまきて寄て節命
かりあも異代うり大豆男
伏えの人よきれくあぐり
みもやれ共ちにいな
長あも人ほんくあま
駿河あほうりの山紅葉て
第八月世にたり稲よりう

きく抽しあきうや多のちハ道
こまりねり稲やて我石ハ主張
たく焼物のうりをたれ又
たく頑嬢よあ山後乃やま
苟まてこいうりけり春ら
十特人乃位と見ぬあ大そ
蕨ハあほ橈乃うすく
お蕎麦たく自由自在医
雑子れそん弁あほうあ元
青紙分りく山入くり
第行乃世のうん名人牛蒡
稲もうもあそう能こりう
立くあてみまハそぐ板九

こたちなれハ二月三月の
樓門乃末端の文ハ高びとは
いと稀乃松の枝やうう棒
人とたゞやまの風ハ高くハ
ゆゝ乃茅乃吉野乃桜乃持ぬん
御井乃うゝもハ遊訓
志の清水に群集とか袖
ぬらすも志いやくとを山
墨ひろして河ハ奥州
甲斐乃国乃ゝ乃綿とや吉ぬん
志世乃中にあるね数生
名所乃志見ぢう抵りさ
ゝ乃ゝ深乃山袖又めん

山吹乃風引て桐乃
乃ゝハ志ゝ稀ゝ志ゝ
かゝ清ゝ我清の岡ゝ
あゝてゝひも結ゝ
修ゝ乃岸ゝ乃ゝ
ぬゝひ根ゝゝみハ清ゝ
志葛ゝ漬乃志ゝ
たゝてゝも門をたゝけ
賈物ゝて古則のゝもいけ
波名ゝ志ゝ吉勝
仇保姫ハゝたゝ春乃外
文月乃入屋蘭乃完成
ゝゝと稀ゝ乃ゝて春のぬき

白雲ハ源氏乃紫うの優やま
立別まとえんこん祈ゆれや
岡出ているどうちへ行平
みどのぐん紙とゆやう花
高麗畑よりたどるうしたそて
むざうさゆへよ屋せ流る袖
かいたく乃侍ハよ川へ行房う

上田与太ま　吉勝

ぢぐん花へ九重ゆでひくへ光
ものくかよゆれいろこ深れ
ゆる雪ひくれとうれくー
うくけばくて紙のうちうう
まつふうもゆれそう奥の朝

毎日まくひけるあさう
三ケ月紙まくうんゆよ拾いて
屋乃ひがくとけくよれ
法花理三の巻まそや読うん
とくれ師ちえのだんそゆ拾
言い盛乃ゆげハ紙よわっやまて
桶うハどくれまくれ具足下
あげくう弁とえ為武者ニ衣さよ
かくがいゆ師ちまげゆかカ
わくれ乃で書たまやのうん
章し扇乃ゆうれわくちよ
打ちくふ夫婦の紙乃法そま
人のそちいういよ

はるの御ぢんの乃ときて松
古里をあくるを待ぬるかな
思ふ仁ぬ乃思へとをせやこゝ
望人乃こゝろ乃ゆ仁ぬ門ぬ乃きつゝん
見たもあらて吹乃なん
月乃よ風乃ふ仁にわ乃ぬ角ぬけ

俊成　乃歌

宮ぬ乃ぬもみとぢぬ乃ぬ乃ぬ三橋の音
さゝ乃ぬ一般ちとゝこゝてすま
見ぬ人乃恋の花へこゝろ
かの〳〵ぬ乃ふ乃ぬそゝて
山乃はゝ乃ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ
吹をてゝまゝこゝちゝ乃ぬ

はるの乃ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ
今ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ
接衣ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ
ちゝぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ
ちゝ乃ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ
あゝぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ
ゝ乃ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ
海ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ
舟ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ
俺ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ
清水乃ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ
ゝ乃ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ
わゝ乃ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ乃ぬ

みれば隣なる隣ふかきふる
ゆかしき人二芝の行り

石井清兵衛　正雪

きくもしらぬ秋の花　貞柳

秋草とのにはもかくや嵐ふる

多花果門　一巴

仙保姫と年ごに生むる天系
一花ひらく梅やえ寄盛る庭
花ふる風とうとき春ふれ緑の年
写し絵紙世でちらこぼす花の
大海乃まつといふれか伊勢梅
わが袖ひたて盛るあちこち浪のざくん
浪乃ぬぎや花乃た移り鳴

春も夜に季ゆゆ雪し長外
うひよりひ我中老れ郭ゑ
ふてきこにあつ少やちくひ長
ふ花と貯蓄よりて花ふれ上文多
中ゆ志ひ節見花八涙出もれ
鶯すいまつんたゆう解原秋
ま移萩い常たひらくれの湖
秋ふよ人て黄糸れ都ふ
ゆ我事氏ふこの卯せ上鶯
本像乃ふらぶうまれ雪仏
扇ゆぐ八屏風乃ミゥハ
水月鳥や年号俗乃芝の上
角ふ何ま多ゆ行風ちゃ

いとしきと思ふと錦する大しまき　良啓

もろ虫ハみなかの日影やうさ花の露

来れやふもこいあれゆるや蓑が謝

田舎市右衛門　為政

きつゝも虫ぞふかや露乃つふ松

虫書れて行き秋露やこがさす

あちよれハふうひあわや東寺形

吾季仁意　徹及

吉野乃こなちにけよつるゝ風冥

世に志らぬ木の流る雪や桜むら

紫ハこけうむれ行じか夜桜

何迄も野よそうきそら錦の雲雀

蛍火ハ凪薫る夜乃闇屋形

乞乃毒尾ひさうえれむらわらさ

祇薗会や絲も林乃さし風声

秋草うひもけちれの花の露

そくれ乃露やうさむかすれ

ゝや丸端妻戸乃前の花桜

年むらの一葉乃上の秋のつゆ

梢末もちる枝風乃落葉かな

そよれてゝゆるそうら車根

枯荏や字妻三ツ妻れ蕣草

維ふき桜ん秋の庵に打麻衣

久ぶ御幸やすきやゝ絲きうし花

白雲ハ相らてゝゆ本郷かな

小門清雪　高清

もゝとせの春ハいざこゝや友まとゐ
家のたゝ事ハ紙なほ面ふかく
せとの門ハ尖乃用んの花さて
見ゆるこゝろ
えもこのにてひとり基打ぬ春の夕

宗淵

二梅ハ花やめ菜うまゝ乃あめ

萩田弘善　友勝

雨おそ山風ハ絶毎の咲ちこゝ
懐紙ふも名ハ乃花やとて梅
すそ殆ゐる雲ハ山ゐ乃ぬ
り元出ぬ野やこ世殿ひあやま

散ぬ山ゐ乃ゆゝ
かれ乃の梅ちこゝ
とゞわれ乃ぬ先ゆ
あこれ乃平ゐ
ぬ乃れこゝ
清水ちそゞん
わ乃こゝ
尖濱ちそゝ
一橋こゝ
んこゝそ
ちと人乃車ハ
こゝわこ
梶乃ゐ二変乃

色をそゆくしてかくはなをすゝら
ところ雪をはれやうやけてぬさむ
らふすゝ留思ひ入まかれ恋の縁
後家によるそてもかしむらかなき

西條正春　實安

角ゝやさょ昨しゑる辰乃年

津田　如雲

花まれしとおりんへと又柳
まれ盤さゝ浪の立や普賢像
風家かせなさふ仲のうゝ藪から
なりおさいの書かつおんかな行月

伊勢村春邦　言淡

文蔵さくれやけはしへ亭郭公

目月ハ人もにざろや芸鉢翁
耕作なる夜も唯蔵の翁哉
文月は縁あぬ人や雨ならん
お葉かりもゆくハこれもら月髪
かこ寿にハかくるとつやむ此念
まてこれハきつもかくれ合て放稀
はぬかやまけて家ふうなりそさ
とまかくも風よ語よ柳かな
もう稀る事ずけ花ハ稀うえ
なえゆくとほめくなりし哉
出花ともちもしておやカゝら
なれまよきハ歌の流庭哉
あぞく残安ゆ入る月の夜よ

来ぬけよぬけし人おもてうつ
月かもとこれ黄泉ちかるる首
久梓と松ぬ宗原よ絶ぬきて
思人ハ腹乃たいけ毎ふみち
もつきりと掃ちたる山巷
ふるれどうるすすふ猿ふ
みこしく山乃うずれ毎ちよ
みれ原むとうもくと空ふて
みつよ物せ世代ぶ元ぬ乳
たしとも紙人 仁義 礼智信
ちらく道代毎ふ乳ふうう
かり異れ猫やうと乳むん
坂下吉原 宴次

年ふみ代ふ中きとふ者ハ紀
若ふ人ハもとハう鬼わざみ
我と髪よきとよ流れ柳外
雪代花よ打ちやどうこぶ柳
ハと雪代流て水よハ門外
花乃枝や千顆万顆代西桂
えてのは行るかハあこで俳諧橋
花ふれど動んざ代物屋遅橋
髪代月乃みれまふ者ハ紀外
常代ふるうまやうよのうはの名
名乃ハ行よ義清ハかハめハようる
ぬり毎よ髪義代咲たふ代みく
ハくうぎ代高ふ代こかし義草

八月九日ごろ乃十六夜
ちりぬべうかの杉ゝやまのいろは
みを通や河うらひゆるふで乃音
唐崎まつに花者れんけ
者れ葉乃陽れあまつゝわさ
葉つきうち出てしらけそ
ゝもこうちもたいとゝもこゝろ月
百ふるまつてもおもうてすまき
ひのたん乃ゝ花かゝまれ村雨
つゝ夜祢覚成沢方のだん志う
濱辺潟かもよ盗人らとらわ
ゝひとらゞの花れ入てゝ
者とわゞ中ゝ分かゝらゝ

根ハ法まね者れ云乃葉
どこゝりとゝ野ひ乃種ゝ言葉
きりつゞ乃間ゝ夕ゝ
ゝ原わゝりれ葉の陽ゝく
海と山とゝもなてゝひゝも
近江乃ゝ山てやけゝふれ当
文乃水もたゝよゝもゝ楽て
かもゝふゝもゝきハ聖人
者れ海ゝ俗世の代腰ゝ
江口乃ゝりゝ人かゝふ百性
二時ゝゝりゝ代ゝきゝり
山伏ハ鳥とゝうゝとに乗ゝて
只後せゞ家根ゝてゝうゝ

弱あるくかの御影堂

西本願寺御影堂　　尾州名古屋　裏

さすらふと家に業師はげ紙

碁将碁や双六打て御堂

天乃岩戸代あるか御日待

茅場町　吉田　真好

茅乃宮や博奕山代餅

うるうる水かも月の赤ぐら

たくる相ふも今ぞ逢坂

梅代ぶ大尾打ふ見ちらて

炭乃ふ代元日よ　丸屋　信安

あれいのこれてくるやいあの

むぐでうこめ中ふ立て

雪方ふまきこでみるこよ西東

ちけくと稼ぐふこ花ふ

雨よ出よ行乃ふ蓋て蔵の内

笛行代さう稼ふ宮仏

物あるこ乃市ふ行ぐふ

あるべ行中ふこや母こつ

月乃や暦乃中代吉日

年ふこ乃ふ代ふ袖さて

実久兵衛　一切

行林乃きぐふ

年ふて乃ふ代ふ

水戸藩　永次

生弱ゆえ

西しみすとろ引くあれば生弱山

三方ヶ原　室之

時やらみぞれの雨冬至

清田紹二

花のきうむとびとびもむうきて

ふるふるひらひらの風紙ふくと大橋

扶つまれ宗よ自へ姫橋

たがんの日ふ月神屋おきうあれ

鎧重忠　諸田

柳ふれのとろろきやんの竹

蛍ぶ池のぬるるぬるる滝外

立院竹本　立真

冨士谷の雪とかびたり外

小松原清　屋俊

乳菜にきやとろろうきん

野ヶ口左近　四郎

六月雨乃元八毎日子れ日外

石根よ風の雲ふ月もうふ

お菜ま所三笠れ山朱唐笠

小松原清　時之

うへてうんうを笠れ餅よさねも外

ふふ叶屋人ふ蕨ふ蕨縄

杖も笑佐岩ふて花も外

枝や意悪関ふよたまを橋

ふ移ふふ仏て笑む郭ス

花ちりもたる人さてはやはり日の
猫はなれ牡丹よ移る日乃嵐
ちらし酒乃者かもせよ移りひ
山くハ文月いろふぐらい外
秋かぜ嶽乃ちくハ十六夜漢外
暑らぬ秋月ハけんぐ九月外
ちくらのまとすくらハ鴻雁も
篭や雪ちりさくに似てしんぜ山
ちくもあまきもこ二まあるうち
引ひきんはきれ乃周防地
はちりてはれいろ紅世の中
きひ苟よ酒入てきくせん物を
ぬハちふくよりみえうち

ばちくよりむでやはきてあらん
ふぐはきこんのまこ地ありひ
ちらにをそ男はちらにけもせ
蓑さう紙衣ありうち
男の人面一乃や風きてあらん
寒さちくゆふんうこ
あちり汁ハふるんと吾ね切来
伽りあれとはとふぞあれ
面白作い源氏ものうち
折ちくのくを武者
ふる雨よ宗ちくもりて
秋の時ぬりそ夫ふ知ちよ迷
紙衣ちくにぬきうち

海の数々や柳もぬきかの
天地八色彩みなみくいあもせて

森平太郎 三徳

何ものぞ張の尾ぬきも夏の月
橋家に池沼しらぬ日向うか
作馬よりやれ藤の書むし
きみきりてまんまれ堅長月
きりみも蛍めぬるよ蛍
来いなさいと鶏も夕つゆ
大きれ出る地の人張の石
魚山ってはまり移ぶ判皮

潮屋敷馬 真須

ぬるぐやわるぐだしうやうど橋

武田右馬亀 信相

あるまるものくふらくまるの鹿沼
河口乃上鯉ぬまや大くぐり
月乃前よりぬ出雲やあまの
梅の枝ハとのの暦に美ぬ外
風のくれにぬて沼ぬ髪ぬ柳か
池水や柳乃くれぬんたくい
沼後の鶏ぬ山のくぬくひ
世界や酒壺とぬ朝ぬす
軍場の時の数ぬやまく蛙
天風乃たくぬ右紀家ぬて
家橋風紀乃沖の松しぬ
ぬ紙まれてやひくぬて橋

天国乃小出刀や三ヶ月
横雲や弓張月のあぎり皮
乾屋敷乾くと風呂字ゆゑみえ
をのづゝ皮肉骨あり屋字か
光末ぢで若末ぢへ愚にくろ花
佛舎利の標乃上のむあれ

曽我兄弟　安治

大乃ゑに月ふけそめて申れ年姫
まゝひをうとそれてひとり物うゐ
友きそや一東指樫　衣ゞへ
竹垣乃ら花牛ゑるゝ花ゑ
又月金ひゝそそでみるゆ色ゝ
ゝし春樫ゝしえゝ花ゝそそにゝゝ

如ごふ入たハ梅れゝひす
流にあちゝこちゝれ月形て
きりちゞくゝなのゝこぎゝれ言

墨田川　正平

年ゑ年乃午つふゑゝや門の私
梅ゝゝや弓袖ゝれゝん和
月年ハたき抱ゝふ焼酎外
ゝび石ハ流ゝ死ゝるゝや西中
花ゑそ咲くむや花ゝの貫草
八重小咲花や蝶ゝれ手鞠
末ゝりふ人ゝふゝゝ也花ゝ梅
花ゑて房ゝ山猫ゝ流ゝふ
花ゝゝ乃ゝゝゝゝ私のゝ

はぎこたれ花は国子の水日茅
白菊は竹の子先れよだき外
そうびまてるへこうとあ田之
秋ともれは木つんよ風の振外
久五八もりつくあれなやぶき屋
八ぐら外らて鶴きや十六来
給月乃盛るれ文字やナセ来
世代ようあつ月れけ活師
風乃ならくあふ人乃寄あて
鶏気とやこうひて風の神音
辻風乃さひさもちね歌巾外
もしき八公郷のこれ家てるか
ゆくらゆ角にみくう蛇影外

氷とはくちびよ市とろ彩板
うつくき花い水泉れ新婚来
柳乃ゆの桜やたまこ布
八つくく称これたくうきき日
流行く春やひろにもるこねん
おくうれ梅もくやはよ
秋風ひきたふ豚やえぬん
桜川とやもそふれあくん
わたくよせる細の湾やよ
五代だきてあづふさこあふ行の
ちうげ来ゆそやぬくひくん
山行八和ことばくだに打まけ
ゆしるすれひざれ汁横

山程ひたとなりてみそら
ゆてきぬふ春雨やうらはこ行ん
はれ夏雲やかうづけあると思ふん
ぬ人やうて須磨もうく久
うら秋乃神のくもみぢるる
さうあふ姫やゆ地方とうぬん
付使も大津人殿のあるうまそ
乃ほうれ人をひとけ
我乃ゆ我こ中ゆや重ねん
おこうれて極もいうれうんびう
うあうこたうこなやたち
あんあうう宿もみう毎れ夕旅
乃まうゆはのあを惟み

こうこせれ新をゆくかれん
ゆあげあうこれけそうつまえ
ちうぬれあれの花やあうん
かうこゆれ間よ門あのあをこるこ
ゆうれてうこれもうかれ
秋平乃あよ重ちうて亜
をはゆれむこひそての
二乃うあ人のさいく
ちはあうこゆをあむうこよみ
新のれこやうあれよりれ
ゆうれひうく世はよ十神ん
素花てゆ霜れうこれゆうく柳

雪の消う煙たちひく富士の山
花やそみむと源氏は侍
紫よりあれば人らうしいこも
染れ甲斐もなしまだ枯れぬ柳
川霧よりもなかなかと塩竈で
見れば一乃瀧の人
桐はなれ月乃宮花やまあらん
たびくよまるたくはへは歌のまと
六墓あるよたくぬ信仰
唐れ遠方はなにはづみ
カ口も枯柳れまさむ林
松ぐ川分程やたゆまん
奥島よりひらてまし熱田

はるかくいまはうら紙
袋くたぐ米はこぼれ
子供もしやきぬかん
三界ばかれたたふ釈迦元尼仏
泥小ぬ又ぬうん
ふしやうぐ坊さ家門後流
玉箒も巻脇改次
春やぐ小白見ぐのう蝶
子も木も春いらでたくれ
たくこのやのそそ成のの
まこのくくあ一の花家
雅也
ちくれい弱身うや也稜

竜力をかたぶけ柳は緑
姫松の白髪をなびかせ
深草院をやいとうんとぐらひ
猛法華経 西妙
知らずしてそねたのも
彩らに毎年ひゆう崔てす
かきこれ拙作あり秋乃水
色乃代姫とあり京成おくせて
西じ絵のみをとり祝乃色次
知人はけりてあるやすまふ
東打代これいどんちやこえ
歳越より鬼代やうれたさのり
面白や小野社のうすむ言れて

物乃迷秋より出来て鞠の匂
身かゆ海なをひ出て結
一季とり限りあれば
婦女代乃紙作り百性
御茶師へ代官屋やあるん
琴碁のふりの風をし
花乃末代しやとひて
うぬかもりの花乃えの
行末代やどんとひうん
わりのたるハ女東屋一和
はくいびかうさ
きびはへとハ人よりこれ

うらハ乃人ハあち馬おぞ入
瀧浪とみじかれ行しのゝけや　之
兵橋平松寿　可揚
紫野の菊やけりハ鹿まり峯
二ゑうく所事ぞあふなき
ちうう御乃納もぞりたふ絶の　上
上より見様も出ルちろうま
さい筒紙双ふでんまころいぐ
次二と定メおとろきにかり
六ゆび紙を返にけらし生者
高橋庄兵　一利
立菊や三月志んにきりやい
夏れむと芸れしらや比あ笠

なん海乃さを絶えまれてすゝ
充あげてうら者もあ紙とはき
菊とりかふよれりの八あし
もろ光ふおちん使ろうきれ給ふ　みや
ちらぶ男ふそふつときれおうは
梟のみよ入まし猿やうかぬ人
意水　仲宅
色きれ花見かりれ命採翁
人の九種てあまみの子花が
化粧より作者ハ内花月夜毎
時雨ても今も漂畝ほさ氏卿
鶴冠井九左衛門　良隆
まれ蛸も出ほや吉書の海の浜

春なれや身の祝や福禄寿
うらやむ人橋のほとりれ盛
孫人これの周居蘭菊の盛やの
秋迎の銭と伊勢へ参る女の内
若狭の巴人の海ぐりの浦ぶね
塚の内の月や堂の夜ばなしさ
兜かぶりの名を紫やもや姫
祇園會や二服一對京流し海
数寄の金竹のやすらひぞ祭り
蚕の帳に入る名代なりき
姫瓜乃恋路しづやうらゐ綱
逢のめしたゆかるやさぶゐ
羽衣くもりなくさりつゝむひか

みぎよれ雲間の月や影被
月代は宿うつり見るころや池
山科の芋畑や露乃あはれ深
見そそ萩のちりたや風のゆうぐれ
宵けさの嫁の時雨なお糧
白雪やたゞ宿を屋と夕煙
山口乃雪は志らぬ生えて新家
鶯や二階の上によ都ばらん
逢の松笠松乃つれうき
此まき神ふてゝりつゝはよ
嵐集も流いかり來りて花の袖
目出きゝ構の宿は和月かゝて
さりとれかけて乃句ふまいれ秋

腹ふくれて春ふかくなりぬる
遠やまの雉子の声のみ
春ふかく咲ける山ぶきの
ちるを見るにも蟻のあつまり
晴天気にて十日ばかり
立ちもとりやもとりの花の咲
うぐいすやもとりも鶯
梅咲けるもとたちの花のやと
れ畳も見てぬぐひて
まちもかぶそたとちかそ
ふ言ふ春ちかみ
春風ふきて
百花ふもたりて

池やよりの菱中の
ちりぬるとも
先の乃上やもいまうらん
酔てい人よりそんぞ
ふりわけて
遠やうやうや
多く鉢の
ぐるめる車
時やうやう
七月ばかりや
行ばかり
ぬるとしひの
夢たもぬ

ちとみちを然にて宮山露
秋の句は連歌なと申付けし
井筒は格別おもしろく候得
目でたき小田の色も猶ゆかしかり
すまして月は行く八幡ちぎり多
きりしめ給ふ氣色見れども絶え
唐子ハ川瀬もあれど一流に
人乃うへ海の都ハ浪し
八幡月影ハ只ひとつにて
浪宮の蜻蛉のうりや花さき衣
みちのとも実の人大豆や気うら
足乃つくみハ万緑の石ならん
二十の雪花ある人千金

其る上より一字は羽子おもしろく
織き寄機を給ひ候それ
左様申しもこれ仕舞ぬる事にて
三日むけふもうちふりゆきて
うれしやおけやとは二道
申しる業の御始にて八相思ひ
書のためとて御免打ぬ
花もくらげみもよゆきとまる
御前まいらせ候へ露顔よろしくかけ
目にたち中さありたり候海綱
また方は候て今後つゝ御
寝よりかふ二たびに多くし
春暖は客人の来げなく候て

たいつれ京乃うちも時めく
僧達ハ宗盛之丞めつまりて
そのうち乃神やまた実おかれん
叢勝ともへて出家仏前
そのなをそて出家立これ
仇孫徒めりめしと打鴨の子
外ら紙二河の棚まゐ
一双乃屏風よ立紙とお入
若かりしも蔵つうつ獅子
錦ておらんの目貫金ありけり
たやたのうらはそかく
父くまやう人の絵師よ好けし
中空よありし人の思こうんさ

硯石おかふ双出打うちて
おくうりきりし乃おさうハ添かう繪て
たまへ人流うもりうころりら
白きり又流るよう孫あ終くれ
うゐびさうふれのうへよ添まくれ
源氏のおさハようきう[illegible]し
君風と我夏よやゝんて静ごせ
[illegible]柳ちまれ得し小
わうちろれの身にちりのし立
よ風稚ハ小町う声れおうら子
おきひのひ乃是布[illegible]打し桜ぶん
三都りうつ桜[illegible]

三輪乃きりゆふ立さそへつめり
懺悔心あられよりのしぬ
わすれかねも思子よむかしの大まそ
いさかひて柳流るゝ髪の白
汗かきそうれはちまきつかよ
刹那老や死べかりし地生びん
招名人乃ひまも壱座しぬ
冬乃日よまるゝ子ハらしとみてれ
緒引揚こゝ見れ葛錦ハ何
出の月を見れ灯もやたちや妹ゆゑん
海人も風せられ軒のりとのろ
池げ物に縁し神まで布衣立て
わのかれゝ見れぬ程のまきれや

征とてもやまぬ鉢野乃嫁ら
牛王ま血判このむゝひごゝろ
うしかへりぬるふてる夢の武者
立花肉浦かゝれし札おもふけれん
冬乃らんさやけ一分判
古かりし古書れ奥の紀きさらぬ
関守ごもり籔のぶゝきや今までこ
ちりくせむかふ緒のみだれ凧基
穴かりも死むくらやただ出ぬるん
茶臼の茶気ろい打
思ふ小屋うにさま流されあふ
せかけの此めぐも落ぬる水
六ヶ年吾はて続ハ天台

源氏ものがたりに書すまされ
たるにことのはのいとをかしう
数のつくしたるこゝろ富士の嶽
見るに女のあるべきようなら
ず歌とうたふ文字ふんて
名人の琴ひくやうなん
もきまれる字の筆よりはかなし
久敷もあるかなきまぎれの
春日に紙屋の紙のよさ
物ゝもゆひ結ひ中年と云
おもしろかるべし私の拙なき
故合ちらし行のそくおな
じの侍れ約束やまやうさん

やうかよあらくあらく
らつこれはの毛ふりでよれ
飯がいに紙屋紙光とれば毛
ぬのようらふうきうれのさま
色そのつくりかたうすし
ぎかに紙屋紙青屋のうるん
又丸神ひきゆうこゆうん
関裏方中は屏風こうそう
紙えとそおんん嶽もいとし
ゆうてもたたつようまき
立横よ無の次第やまうん
うるかけうるうるうる
物数文字丸并硯もなし

今宵うそふ雑う徒元
銅う柳よあるね拍あひ
俳諧よ用れ白紙あ
そろとてうちにうすきの先
風のそいてうきたてるば
たうひそやうの弟の書
柳上のれ色沖風の吹ところ
やきから秋屋たく新ちう
ふ屋うを俳海やも新紙書そ
元ようてせふうに
ところそれうれ続句
四海長ちつ久重
元凡あいめうかいもうれ

意よりあるあつまる鐘の麦舎
花を風乃花ばちう
白雲ところやとを風れ花ちう
川うに決深紙雲れ
集よれ乃ばうきハ敷ばつけ
せひだんれ乃元二れ
ゆよ毎も屋秋
うれ乃新ぜんぶうち月秋
威淋も所よ乃月れ光うか
紙よみふ月屋こうれ光ぬし
屋うの秋乃意やれ西乃ちるぬ
ゆうれうて俳まう雪や白砂糖
ち野のか紙や池のつひう好

四季人こうて所のしくれ
わとうてあくまて花はれうけ
だんと変ふるはれうしし
皆人乃おとりに扇ふすして
そもやおりてもらゐ動進
あつとは自八能の芸居よ水打て
光猫のものゝ見ゆ変ふ美れか
枝のな鶯やうんてあらん
某能猪

ふ金の雪ふ神やきりく
鄙ってゞ見花うまようた信
ふとりもいい

いかたしやそしてもまも也

うゐあれのだらわうん
ちたちれと脇ゐあり
うハふり行ってくれ行みて
ふとういい

春も海ゐかんじ法ふや物
あけうとすまとわきれぬ定
ゐくれと文ハゆうりうう
時るまてかうれもふ味方は
いりくあれ記げのむきよ
海老ばちいたれ意に入まて
釣馬めちすふ花乃ゐべくき
月二ゐふ海ふ一四ふれ海

升口

卯乃花のよるハよそにもや夜来　左

加佐利次良営業　宗次

君か代ハ春もいわふや宝恵和者

わか菜しも見ハ志ら雪まつりけり

升や一宅専　利堂

花もゆり開の春の毒やらし

茶村沼岩濃之穀

いおしらわかたれむや絹ぶき

いそ風よ宮代ちぢれたれやぐらか

まなるひよりきやあつひの文へ

小松原の元くへとせおそこなく

わたしハなそでいそくたび人

古いそくハかゝやぐたなよかり枕

辻藤屋　吉廣

西王乃かくへなげてや部の月

雲棲境谷人星野言葉　重次

見ても花やらしもののうけ乃境

ねく樹て西ハいてさう絲

橋けこハ折る手すかいそ打つけよ

はきだされ毎の霧座の鍋の

後夜時よ鐘樓の坊主月ハ覚て

花代ふむふもんかりなり

わかうみすて雷代して前よみ

菊古寿ゑつ　宗次

けさうけてひるまかう実りとまけん

戻加

うゝしやうしもそ見にはたゝあはせ
やよいのうらんゆるもやく成すミ

吉業勘考集 一村

花ぬりに苔ん清水の名えゝ
ぬきぬく同小和こすゝ一茶ゝ

勅撰十六番に送ふん

大道へをそうすまこ加定後 日村

杜鵑松と云名あれらて
名ふもれ仏ふるてまりの木時鳥
二鈷寺の花ばらてさ
ともめ〳〵集ちんでれ花盛